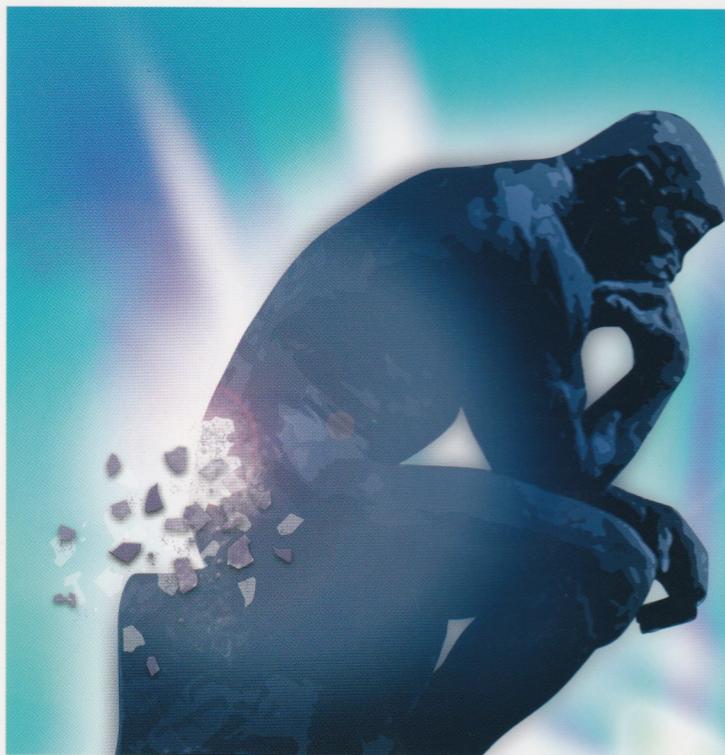


# 第15回 日本腰痛学会

The 15th Annual Meeting of the Japanese Society of Lumbar Spine Disorders

## プログラム・抄録集



会 期

2007年**11**月**10**日(土)

会 場

**シティプラザ大阪**

会 長

**米延 策雄**

(独立行政法人 国立病院機構 大阪南医療センター 副院長)

## ご挨拶

第15回日本腰痛学会開催にあたり会長として一言ご挨拶を申し上げます。

腰痛は、二足歩行となった人間の宿痾とも言われています。つまり、四足歩行から二足歩行への転換は、腰椎と膝関節のアライメント変化なしにはなかった、そしてその変化は余りにも急速であり、またヒトの著しい寿命の延伸を想定したものではなかったのかも知れません。この考え方の是非はともかく、腰痛が古くからわれわれ人間を悩ませてきたことに間違いはありません。故に、整形外科の成立以前から、人々には腰痛の経験があり、経験から生まれた知識があり、それは今でもいろいろな形で引き継がれています。



一方、腰痛が「腰痛」として医学的に、社会的に認知されたのは産業革命以降とされています。医学が明らかにしたのは腰痛の未だ一部です。そして、医学も経験を重ねるという方法を腰痛診療には用いてきました。その意味では医学も民間の知恵を凌駕しきったとは言えない点があります。その結果、腰痛に悩む人々は医学以外にもさまざまな治療の手段を求め、そして一定しない結果にさらに悩んでいます。

高齢社会になり、腰痛を持つ人が増加するだけでなく、腰痛が生活不安の種となり「腰痛」を悩む人の増加ともなっています。経験が先行する腰痛診療の質を高め、社会の、混沌とした腰痛事情を改めるには、今まで以上に「腰痛を科学する」ことが科学の徒としてのわれわれに求められていることと考えます。近年、急速に進歩しつつある椎間板の基礎研究を始め、臨床研究でも腰痛を科学するアプローチが進み、診療ガイドラインなども出されてきました。そこで今回は「腰痛を科学する」をテーマにしました。

また、EBMが唱えられる現在、治療手技にも均質性が求められています。特に、保存治療の手技については、具体的な研修の機会が少なかったとの思いから、「非特異性腰痛の保存治療。基本コース」を設けます。

最後に、腰痛診療は医師だけではなしえず、科学的基盤に立つ関連職種の協同なくしては成立しません。その意味で、理学療法士の皆さまに今まで以上に参加して戴きたいとの願いから、特別なセッションを設けます。

欲張った企画となりました。それには、本学会のさらなる展開の願いが目論見にあります。先生方の御支援を切にお願い申し上げます。

会長 米延 策雄

(独立行政法人 国立病院機構 大阪南医療センター 副院長)